巻頭言

寸　感

九州大学学長　神　田　慶　也

昭和46年6月公害関係法の施行にともない、産業排出物の規制と基準が一段と厳しさを増し、罰則も著しく強化されるようになりました。九州環境管理協会が昭和46年10月以来これらの調査研究・講習会・懇談会等を開催され、会誌・資料を配布されて環境汚染に関する情報活動をされてこられたことに対して深甚の敬意を表するものであります。

ストックホルムでの国連人間環境会議で無計画・無制限な開発が人間の環境を破壊し、生活の根本をおびやかすおそれがあることから人間環境の保護・改善のための措置をとるように、「かけがえのない地球（Only One Earth）」を叫んでいることを思い出したいと思います。

自然環境とは何かを考えてみましょう。地球の歴史の太古の時代を想定しますと、さんさんと照る太陽の下で山あり河あり海あり、それに植物が繁り動物が動き回るといった世界をまず第一歩に考えましょう。いつの時代にか人類の生活が始まり、人間の社会ができ上った時代も考えましょう。人間の生活排出物はその環境を汚染したでしょうが、自然の輪回の中にとり込まれて新しいサイクルとなってとけこんでいたのでしょう。しかし人類が文化的な生活をすればする程、その余波として自然を汚染することになったことは否定できません。すなわち人間こそが自然の破壊者であったわけです。しかも人類は地球以外には住めない、いわば地球の寄生虫のようなもので、しかもその宿主をいためつける関係にあることを考えないわけにはいきません。何という大きな矛盾でしょう。

当面の問題として、産業排出物を出される関係者に大いに勉強して載いて、排出について慎重な対策を立てられると共に実行に移していただくよう強く要望したいと思いますが、問題はこれ丈では解決しません。やはり人間の物の考え方までも検討するという教育のあり方も重要なことでしょう。

そもそも工学とは科学と経済学とを優美に結合させたものであると言われています。その経済性をあまりに追求しすぎたために自然界の生態系に対する配慮が足らない結果となり公害を起したということになるのでしょう。世界の先進諸国の中でわが国ほど自然環境が破壊され、いろいろの公害的現象が発生している国はないと言われていますが、あまりにも経済一筋に進みすぎたということであり、その産業さえ良ければあとはどうでも良いというエゴの丸出しであったということでしょう。それでは工学の破たん（綻）なのかというと、そうではなく、生態系に関する知識を欠いだままの工業の推進であった、つまり公害のひろがりは生半可通のうわすべりの知識で産業に取組んだことによるのであり、不勉強の程度を露呈したことになるのでしょう。

国民一人一人がなるべく早い機会にこのような問題を解決する必要があります。私は各人が何かの植物を育ててみてはどうかと思います。例えば「きゅうり」が良いでしょう。一坪庭園か又は植木鉢でも良い、一夏これを育て、そして収獲してみて下さい。日当りはどうでしょうか、肥料はどうしますか、病虫害の対策をどうしますか、強い日照に対し水をかけてやらねば

なりません。その間にその一本の生命を考え、収獲物を一家でそろって味わいましょう。そしてこれが私共の生命をささえる一環となることを心の底から認識しましょう。このことから食糧の問題を考えることが始るのでしょう。公害の問題を考えることはここらあたりから始まるのではないでしょうか。